

「豚」と「猪」と「豚」と「猪」の字縁

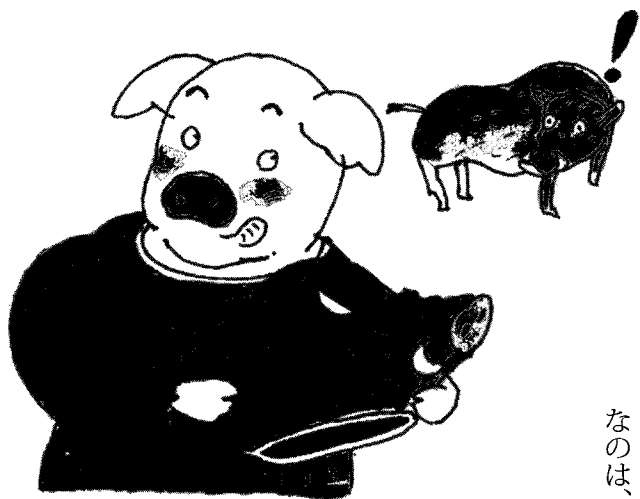
豚はイノシシを家畜化したものというのが通説だが、正直なところ、その歴史的なプロセスについてはそれほどよくわかっていない。それに、イノシシがこれまでにすべて豚化され、絶滅してしまっていたのならまだしも、記録のあるところ、イノシシと豚とは常に影と形のように共存してきたから、純然たる野生のイノシシは別として、イノシシから豚に変わりつつあった過渡期のものや変種など、それをイノシシと呼んだのか豚とみなしたのか、いままっては明らかにしようもないといったところである。

わが国では、イノシシは、ふつうイノシシと呼ばれているが、地方によってはイノコ、ないしはただシシとだけ呼ばれている。

ある漢和辞典を見ると、イノコやイノシシと読ませているものが複数あるのに、ブタはたったの一字といったありさま。

つまり、古代のイノシシは、それらの文字によって区別する必要があったほど種類が多かったのか、あるいはその中には、イノコとはいいいながら、実はすでに豚化したものまで含まれていたのではないかなど、相ついで疑問がわいてくるのである。

中国の場合にもつとはなはだしく、それこそ地方ごとにイノシシの呼び名が異なるほどだ



から、それを表す漢字も複雑怪奇、いまの日本ではそのほとんどを「造字」しなければならぬから、ここではとてもお目にかけれられそうもない。わが国で豚という字の「つくり」になっている「家」は、中国ではイノシシの意味に用いられ、また地方によっては、イノシシの子を豚と呼ぶところが珍しくないといったややこしさである。なかでも奇妙

なのは、例の十二支中の「亥」の字で、わが国ではこの字はイノシシを表すものと解されているが、はたしてイノシシなのか、それとも豚なのか、決め手になるような資料がまだどこにも見つからないというのが正直なところである。

また、現在でも、地方によっては、「いのご祭や」、「いの子祝い」といった行事が残っていて、これは子宝に恵まれるようイノシシにあやかっていた行事だが、豚はともかく、イノシシはほんとうに多産なのか、学者の中には首をかしげる人もあるほどだ。

なんともややこしい限りの「豚」と「イノシシ」の縁である。